

本紙10月1日号に「引きこもり、不登校者支援・神奈川横須賀の非営利組織」として地元の商店会と提携したユニークな活動が取り上げられていた。地元商店会の活性化や地域高齢者の家事手伝い、個別学習指導、書店経営など、あの手この手で社会参加の道を支援する組織・アンガージュマン・よこすかを訪問してみた。

アンガージュマン・よこすかの名称は、実存主義哲学で言われた人社会参加アンガージュマン(フランス語)を取り込みました。会の目的は、『学校に行っていない子どもとその親を支援するさまざまな活動を中心に、学校外の学習及び交流を通じて若者の成長と自立をうながし、子どもと親、若者、市民が共に自分らしく生きていける環境を構築し、この実現に寄与すること』です。不登校・ひきこもりの青少年が孤立しないように居場所を提供し、親への支援活動をし、学習のサポート、孫の手の役割としてお年寄りのお手伝いやお届け便事業などを進めています。

横須賀という地域性
横須賀市は神奈川県平均所得を下回ります。離婚率もかなり高いほうです。また不登校率も神奈川県が全国比で高いのですが、その中でもダントツです。それに、児童虐待も多い地域です。不登校児は全国が2、3割の率ですが、横須賀は5、6割です。いまは一人以上の中学生がいますから、5、6000名の不登校児がいることになり、一つの学校ができるほどの児童数です。横須賀は何故こんな状況なのかと言われていますが、虐待について感じられることがありました。

原則的に虐待は第三者からの報告で表面化するのですが、横須賀の場合、昔ながらの村落共同体的なものが残っていて、人

社会参加に商店会も協力

間関係が密です。そのため、近隣の目が生きているのではないのでしょうか。その結果、他の都市よりも虐待の事実が顕在化しますので、接待費が他よりも多いというデータが生まれたとも思えます。

一人ひとりに向き合って
不登校の原因も、いろいろです。学校で先生と上手くいかなかったとか、友だちに虐められたとか、何となく学校に行きたくないなどの、ある意味では古典的な不登校が多く、そうしたケースには、スタッフもそれなりに対応してきました。

ところが、ひきこもりや不登校が、最近のように家庭とか社会的なところ起因しているとなかなか取り組みにくくなって

「不登校」のことは、文科科学省が認めて以来、今では誰にでも起こり得る一般的な事態だといことで市民権を得たのです。そして、自分たちの思いとか教育観・子ども観を元にもさまざまなバリエーションで活動をする団体は増えて来ました。

私がこの事業を始めたのは、壮大な思いを抱いて始めたわけではありませんが、私自身が上の子どもを病気で亡くした無念の思いもあり、また、下の子が学校が嫌だなどちょちょと不登校児になりかかっていたことがきっかけになったのでした。さらに言えば、ラタバースクールで子どもたちと関わってきたこともひとつの要因でした。

そのころ、自分の仕事がかうまいいかなへなつた事情もあって、転職することにしたのです。この歳になつて何ができるのか、何がやりたいのか自問自



小柳良代表

が、この歳になつて何ができるのか、何がやりたいのか自問自

しまいです。個人の精神的な病気を含めた問題、父親の暴力、母親のうつ病、あるいは、親子の話し合いが難しい、ネグレクト、DV、家庭の崩壊、経済的な破綻など、家庭的、社会的要因から、不登校が、全国で圧倒的に増えているのではないのでしょうか。

教育委員会などの行政側ともネットワークを組み、話し合いをして対応を練るのですが、一人ひとりのケースが異なるため、問題解決にはよきめ細かいサポートが必要で

学校の先生も大変な時代に置かれています。親のニーズは多様化していますし、子どもの変化に学校がついて行けない状況です。学校で起きている事象が、すべて教師と学校のせいになっていきますが、何が子どもにとってよいことなのか百人百様の考えがあり、価値観が多様になってきており、教師は日々現場で苦しんでいます。

登記したのが3年前の12月でしたが3年になります。年を経るごとにどんどん問題が重く、多様になってきました。私の最初の発想は、学校に行っていない子どもたちをもっとのびのびと走り回りたい、キョキョウとしたいと一緒に遊びたいといったあまり考えませんでした。しかし、現実にはなかなか教員、そうは行かない事態に直面させられて

- 小柳 良(りょう) やなぎ
- 1974年 明治学院大学卒業
 - 1987年 東京から横須賀へ転居横須賀アンバスタークルで活動を始め
 - 1999年 横須賀市立総合指導センター指導2003年 ポリシティアルファ未来学習支援2004年 NPO法人アンガージュマン・よこすかを結成

アンガージュマン・よこすかの活動を小柳良代表に聞く

現在起きている学校内の現象を教師個人の問題としてしまうのではなく、こうした学校環境の背景には、学校の閉鎖性、勝ち組・負け組や格差社会と言われる効率優先などの時代状況を考えたいかなければいけないと思います。いま親も子どもも教師もいろいろだっています。アンガージュマン・よこすかには、親や子どもに限らず学校の先生方も自分のことで相談に見えます。若い先生方は学級の運営や親の対応に悩んだり苦しんだりしています。教師のうつ病が増える中、相談のつたりカウンセリングをした

行政には出来ないケア
そういうことで、子どもの相談、若者の相談、親の相談、先生の相談などいろいろな相談を受け入れています。行政には公的な相談窓口はいろいろありますが、縄張り意識が強く、きめ細かい対応ができません。不登校の問題は保健所では扱いません。教育研究所や福祉関係の青少年課や子育て支援課や、相談センターです。しかし、お金の問題と生活保護課の担当になります。つまり、行政は領域を決めて他所には手出しをしません。それで行政がこちらに紹介をしてくれる例もかなりあります。

それに引き換え、私たちはトータルに対応します。一つの家族をケアするのに、精神科医が必要とか、生活保護が必要とか、学校との問題解決が必要とかです。ネットワークを組み、家族の問題、また個人の問題として走り回ってケアを進めます。きめ細かい対応を付さざるを得ないのです。カウンセラーもいますし、病院などとの連携の窓口ももっています。もちろん、行政との折衝も進めます。専門家が必要とするところは専門家をお願いをし、そのほかには勉強会や研究会を開いたりして対応を進めます。

少しずつ変化を見せ始めた行政側
ひきこもりは、今までは福祉関係などが対応していました。ところが当会の活動が知られるようになってから、近頃は、中小企業センターや商工会議所や、県の商工労働部が見えたり、商業観光課とか雇用人材課なども連携を求めてこられます。今までの縦割りの行政が、私たち民間が入ることで、就労や精神面へのサポートなど、トータルな形で取り組んでいる兆しが感じられます。

それによって、近頃は、中小企業センターや商工会議所や、県の商工労働部が見えたり、商業観光課とか雇用人材課なども連携を求めてこられます。今までの縦割りの行政が、私たち民間が入ることで、就労や精神面へのサポートなど、トータルな形で取り組んでいる兆しが感じられます。

◇団体維持の財源は

こうした会の維持には、経済的な基盤を持たなくてはなりません。原則は受益者負担だと考えて請求はしていますが、生活保護を受けている相談者や母子家庭なども多いため、顔面通りにいかないのが現実です。あくまでもこの事業は、仕事・サービス業としてやっていることを理解してもらわなくてはなりません。各種助成金や書店経営は補助的なものであることをもっともって理解していただきたいと考えています。

◇商店街と連携して

自然の中で子供たちを元気づける方法もありますが、私は「ちやちや」して人がいっぱいいるところ。こうした事業をやりたいかったです。

しかし、大型の郊外店同士の激しい過当競争の中で、労働条件が悪くなり、働く人が身をすく減らしていく環境です。私はこうした厳しい世界ではなく、ゆったりとした時間がある、地元根ざした商店会や町内会のある中で子供たちが生きていくこと、その生きるリズムやスピードを感得しながら、彼らの再生ができないかというところなのです。

その思いが理解され、ここ上町商店会の方も乗ってくれました。若い子が街にやってきて若い声が響くようになっていくのは決して悪いことではないというので、一緒にやるようになったのです。近くにコンビニがあったり、赤ちょうちんがあるような古くからの商店街的環境の中でこそ、人は癒される。そして、人を癒すのは人だということを教えてくれるのではないのでしょうか。

◇仕事をすること年々

若者や親は、働くとどうと雇用されることをまず考えます。求人誌を見て履歴書を書き面接に臨みます。でも一生懸命に書く履歴書の空白部分に質問がいくと答えられません。人が生き

不登校・ひきこもり児童の



スタッフの打合せ風景

と商店会の結びつきです。その成果が注目され、他の市町村から呼ばれるようになりました。福祉関係もそうですが、経済の関係部署からも呼ばれたり、商工会議所からも呼ばれたりする機会が多くなりました。こちらへ視察にも見えますし、県内の自治体はもちろん、静岡や福岡からなど県外のかなり遠くからもお見えになりましたし、県から助成金も頂いていますので、フォーラムも年に1〜2度開いています。

また、モデルとして他都市の商店会と話し合いを持ち、そちらとのネットワークを進めたりしています。近いうちにはこの商店街にお休み処を作ったり、パソコンに触ったり、お茶を飲んだり出来るようにし、一店逸品の商品のアンテナショップにもなる仕組みを考えています。その管理は、もちろんうちの若い子たちがやるのですが、同時に、お年寄りのお世話をし、話し相手になったり、お茶を出したり、商店街のお弁当やおやつなどを買いに走ったりしてあげます。その延長として、庭の草取りや、犬の散歩を引き受けたりしていることも宣伝する予定です。

◇ひきこもりの子は「こへん」?

最近、本が売れないなどいわれますが、私たちは本を売ることに挑戦を始めました。その理由は、ひきこもりの子どもや不登校の子どもたちがずっと家にこもっているわけではなく、図書館に行くことが多いからです。本を扱う金はないのですが本を長く読みます。かなり難しい本を読んで、哲学書などから自分を肯定できるような知識を蓄えようとしています。それは一時的なもので、自己肯定感が持てません。しかし、図書館という空間はそうしたひきこもりの子どもには自分に合っているようで、司書になりたいなど考える子が多いようです。それで、私もまさか本屋になろうとは思いませんでしたが、本に携わる仕事には興味もあっていましたし文学が好きでしたから、いいなと思って始めたのです。

本の販売は、書店「はるかぜ」を全くの素人が半年ぐらいの修業で始めたのです。それもひきこもり経験者だけで始めたのです。店長にいたっては大学卒業後、13年間のひきこもり経験者ですが、いまでは、本の販売のプロとして私

◇「学校化」という社会の締め付け

青少年問題には「学校化」ということをすべてに感じます。学校化されているということは、学校でいい子は地域でもいい子ですし、学校で悪い子は地域でも悪い子になってしまっていくことです。学校では悪い子でも、地域ではいい子というのは通用しなくなっています。そうした認識は家庭にまで入り込んでいますから、子どもたちが学校以外に自分たちの場所とか世界を作ろうとしても至難のわざなのです。

そして、「学校化」の締め付けは厳しいですから、学校以外、他に行く場所はありません。それは親でもそうです。家庭の収入の多くを教育費につき込み、いかに学校に順応する子を育てるかを第一に考えられます。それくらい「学校化」にきつく束縛されているのです。ですから慮められても学校しか行くところがないし、「死ぬ」まで学校に行かなくてもいいだろうにと思うのですが、それしかないのです。地域の教育力が低下したなど言われていますが、その地域の代わりを学校がしているのです。子ども会などが機能しないのは親たちが学校の延長として子ども会をみているから、子どもにとっては何の魅力も面白くもないのです。学校とは異なる価値観や違う文化として子ども会があればいいのですが、なかなかそうはいかなくなっているのが現実です。

私たちは、行く場を失った子どもたちに「学校化」されていない場所を提供していきたいと思っています。キミたちが学校を離れても行くところがどこにあるよ、場所はあるよといっておきたいのです。教育界だけで解決できる問題ではありません。